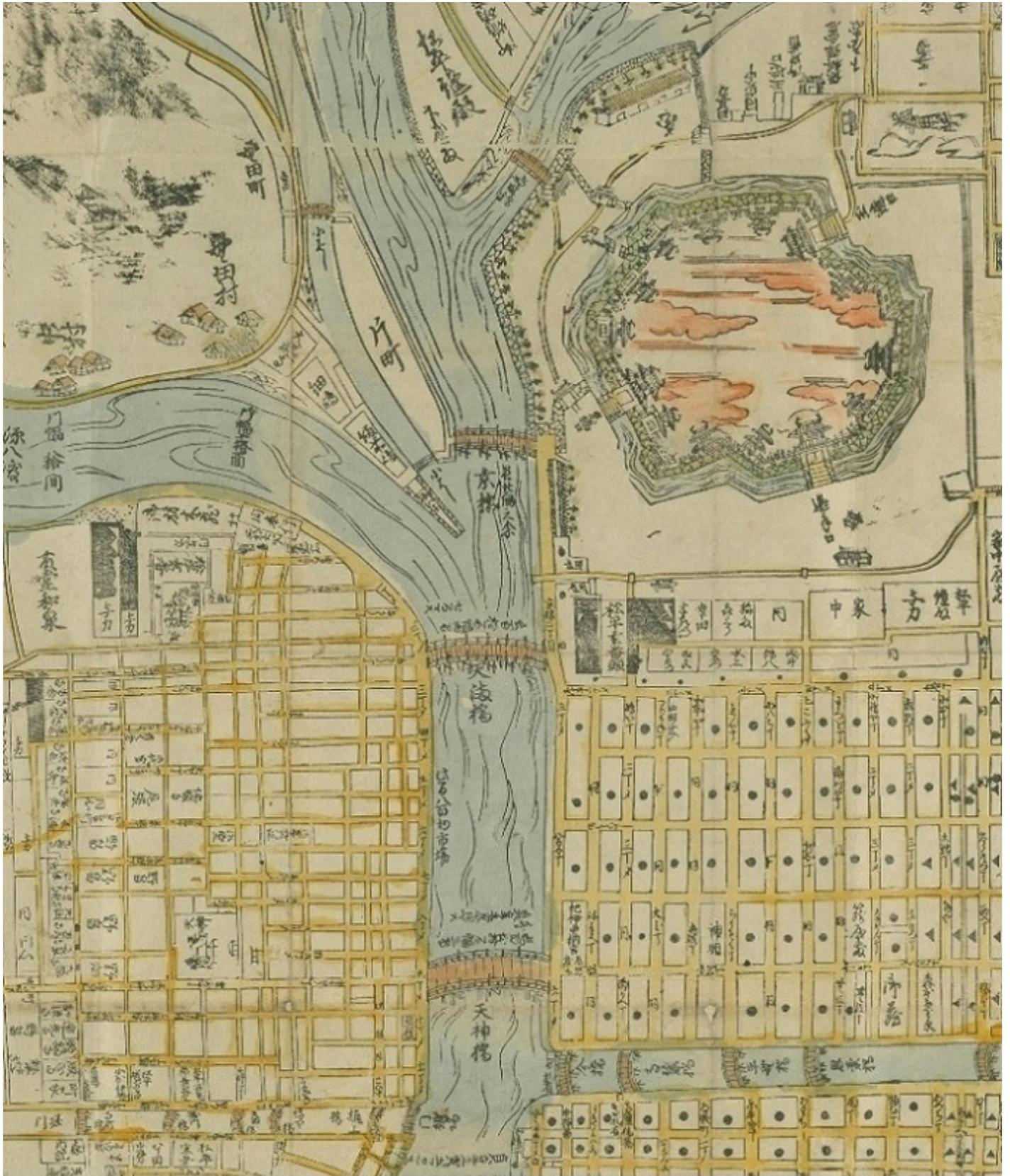




みずのみやご大坂

(三) 天満橋



「大坂大絵図」(国立国会図書館蔵・元禄9 [1696]年)より

江戸初期の絵図に見える天満橋(中央)

淀川  
枚方ひらかた







早く起きて  
ごんぼ汁  
食わらん  
かい!!

おらっ!!  
起きんかい!!



おじさん、  
ごんぼ汁四つ  
ちょうだい。  
お酒はある?

おいしい、  
おいしい  
熱々の  
ごんぼ汁やで!  
食わな損やで

おう!  
二升ある  
で。  
全部  
持ってく  
かいな?!



番頭  
はん、  
どうぞ

おおきに。  
嘉助、  
お前先に  
お上がり

へえ、  
ありが  
とうが  
ござえ  
ます

(一)「ごんぼ汁のじや





(二)淀川を運行し京都と大坂を結んでいた  
十五〜二十人乗りの船



(三) 徳川家康のこと







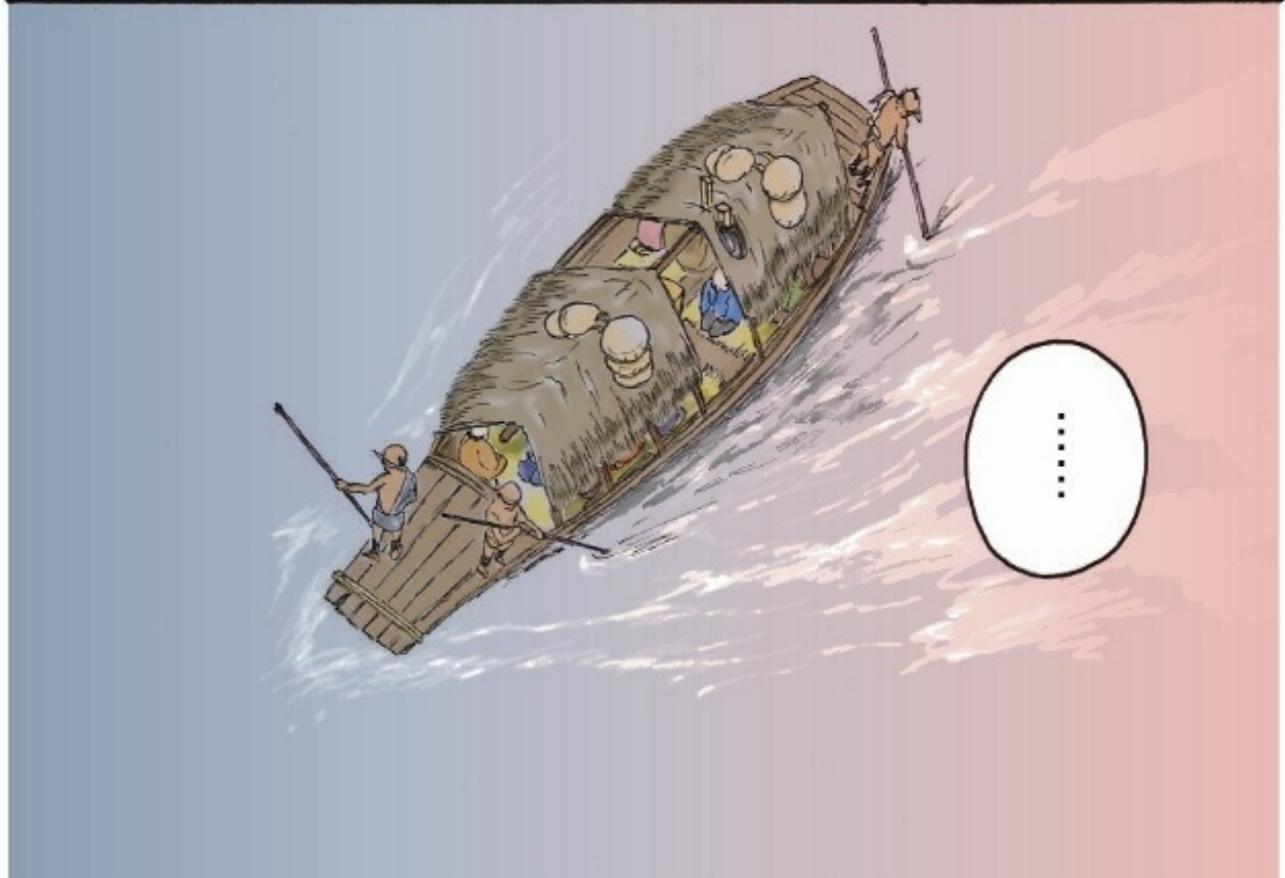
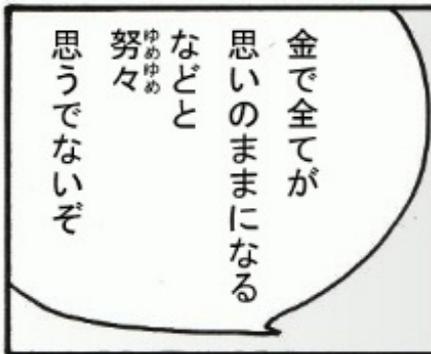


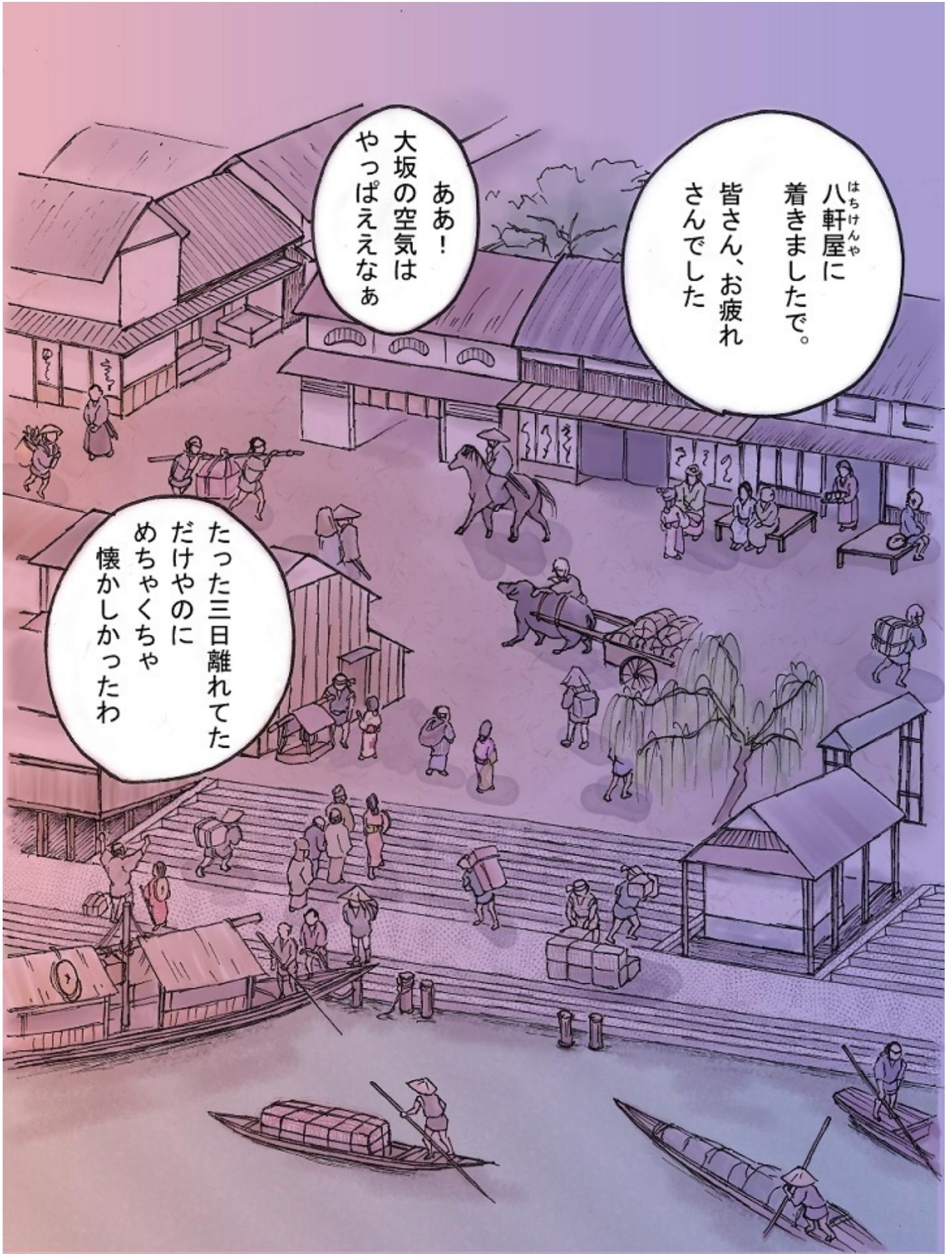


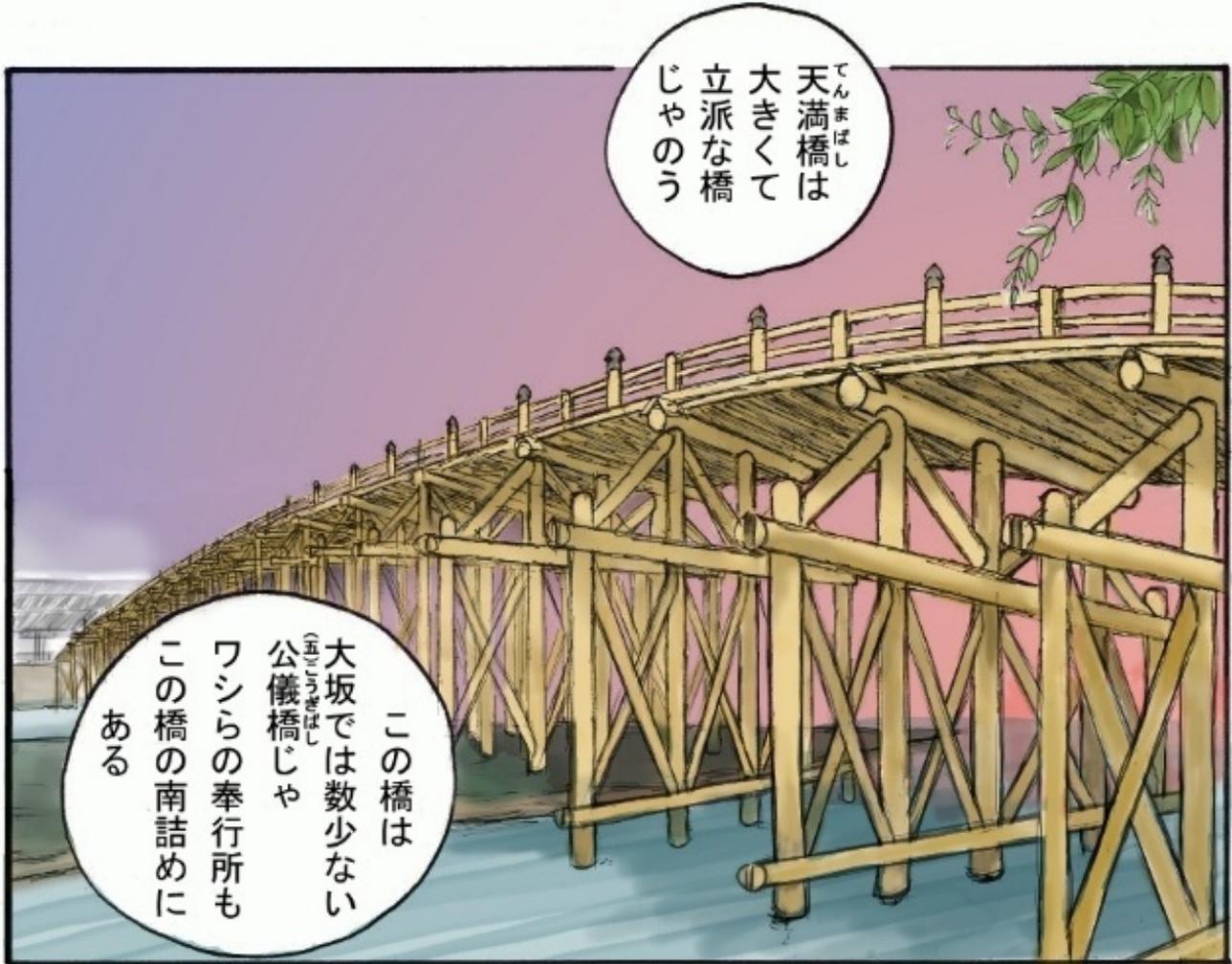
(四)天秤棒を担いで売り歩く行商人のこと











(五) 公儀橋とは幕府の管理下に置かれた橋で、改修や修繕に公金が使われたが、江戸からの認可と指示が必要だった。公儀橋以外の橋は、町人たちがお金を出し合い維持する町橋だった。130~200もあった大坂の橋のうち公儀橋はわずか12で、公儀橋が100以上の江戸や京都に比べ非常に少ない。大坂は幕府の直轄地であったにもかかわらず、幕府が大坂の民間資金にかなり頼っていたことがうかがえる。





私の一族の半分は  
そうなのです。  
その中で母の遠縁  
にあたる者が  
武士をやめ大坂で  
商いを始めたので  
ございます

私のために  
少ない有り金  
全てをはたいて  
薬種問屋に  
なりました



お奉行様は  
ご存知ないかも  
しれませんが、  
我ら下級武士の  
中には

生活が立ち  
行かず  
両刀を捨てて  
百姓や商人に  
なる者が少なく  
ありません



確かに

ワシも、  
我が一族が徳川方に  
ついておらなんだら  
今頃武士では  
なかったらと思う



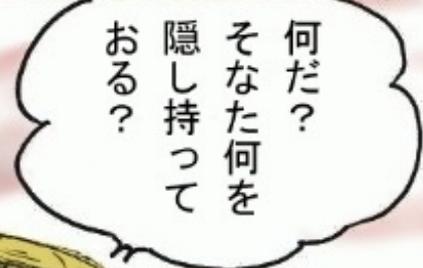
.....



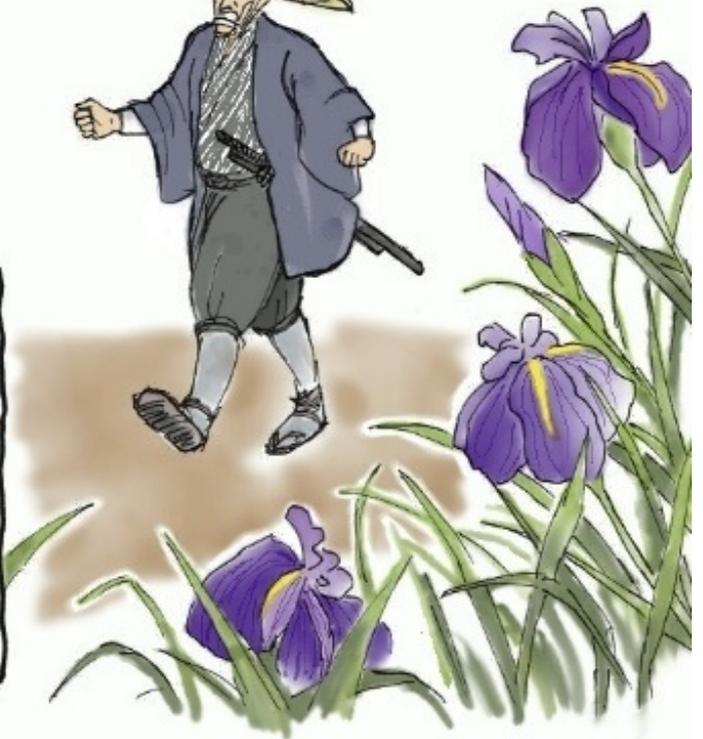
その者が  
大坂で探し出し  
てくれたのが  
今も飲んでいる  
この薬です

この薬が  
なかったら、  
私は十まで生きる  
ことはなかったと  
言われております





月島理三郎さま  
 印籠いんろうの月星つきほしのご家紋より  
 お名前とお役職がわかり  
 申しました。これも何か  
 のご縁と存じます。日を  
 改めまして、東町御奉行  
 久貝くがい因幡守いのはのかみ様とご一緒に  
 ぜひ我らが米市へ  
 おいでくださり  
 ませ  
 言右衛門



## コラム2

### 大阪の基本は市場(いちば)と淀屋？

#### — いちびり精神の源 —

今回のこのタイトル、「ん？どういうこと？」と言われそうな感じですね。

大阪といえば、お笑い、たこ焼き、通天閣、大阪城、などなど定番の名物がいっぱいありますから。

市場(いちば)と言ったって、もちろん大阪中央卸売市場は規模も大きく立派ですが、残念ながら現在では東京の築地市場の方が圧倒的に有名ですし・・・。

また、淀屋という江戸初期の豪商についても、ご存知の方は少ないかもしれませんね。

淀屋は江戸中期に取りつづしになって、現在にも続く企業とはなれませんでしたから。

同時期に創業した鴻池(こうのいけ、明治に三和銀行となり、現在は三菱UFJフィナンシャルグループ)や住友などの方が、江戸時代に大阪から生まれて発展を遂げた財閥として、その名に馴染みがあるでしょう。

では、なぜ？

それは、「お笑い」という最も大阪を代表すると言ってもよい精神が市場(いちば)から生まれた、と考えられ、そしてその市場を創ったのが淀屋だからです。

#### 「いちびり」の語源＝市振る

大阪がお笑いの街、というのは誰もが知っているところ。

街歩き案内のジモティ（地元民）に大阪の一番の特徴を聞いたところ、こんな答えが返ってきました。

「人。人がとにかく面白い」

そうです、何も芸人さんばかりが面白いわけではなく、大阪では普通の民も面白いのです。

また、

「他人でなく自分を落として笑いを取る方がええし、皆に尊敬されますねん」  
とも。うん、素敵ですね。

関西には「いちびり」という言葉があって、お調子者やふざける、といった意味で、大阪の人は生来「いちびり精神を持っている」などと言われます。

この「いちびり」、語源は「市振る（いちぶる）」と言って、市場(いちば)でセリを仕切ることの意味したのです。市場(いちば)でのやりとりにおいて、それを仕切る人が何か面白いことをして人々を笑わせ楽しませ、コミュニケーションを円滑にしようとしていたのでしょう。そこから転訛した「いちびる」が、おもしろおかしいことをする意味になったとのこと。つまり、大阪の「いちびり精神」の発祥の地は市場(いちば)なのです。

多くの人々が行きかい、新しい人や物に出会える場所、市場(いちば)。当時は日本で一番発達していた大阪の市、それらを仕切るリーダー達ですから、自然と、コミュニケーションの達人となっていたことでしょう。その精神が発展して、現在の大阪のお笑い文化になったと言ってもよいのではないのでしょうか。



浪花名所図会 雑喉場魚市の図より (国立国会図書館蔵)

鯛を投げたり、大声で競り落としたり、とっても賑やか！これが大阪のお笑いのルーツだと私は考えます。

ちなみに、山のようなたくさんの野菜が、わずかな時間ですべてなくなったのを見てビックリ、というのは実際のエピソードから採用しました。1812年にお伊勢参りの帰りに大坂に立ち寄った、常陸国の益子広三郎さんの旅の記録に書かれているんです（注1）。

## 江戸初期を代表する豪商淀屋

さて、次はそれらの市場を創り上げた淀屋についても簡単にご紹介します。淀屋に関してはこれから何度も取り上げるつもりなので、今回は本当に概略にとどめておきましょう。

なんと、大坂で三大市と呼ばれた、米市、青物市、魚市の全てを淀屋が立て始めました。一つだけでもすごいのに、三つ全て、です。

淀屋はもともと淀地方の豪族で土着の武士でした。

織田信長に滅ぼされましたが、生き残った子孫が大和の国（奈良県）に逃れて、豊臣秀吉の時代に大坂に出てきて材木商から身を起こしました。

淀屋の一代目常安(じょうあん)は、淀川を漂ってくる流木を拾って売ることから始めたと言われています。

秀吉が大坂の街づくりを始めると、土木の技術に長けていた一代目が商機をつかみ、大きな身代を築いていきます。そして、大坂の陣では豊臣を見限り、徳川に味方、家康から大坂での商いを自由にすることを認められます。大坂の陣の戦後処理、つまり遺体の片付けと武具類の回収、販売をすることも家康に申し出て許可を得、これによっても大きな富を手に入れました。

その後、二代目の時代には、当時の経済の根幹をなしていた米の市場を独占で立て、まさに天下の大豪商へと成長していきました。

青物市、魚市も淀屋二代目が設立しています。

淀屋邸宅はなんと敷地二万坪、そこに百間四方の店を構えていたとのこと。その富は大坂一を乗り越し、まさに日本一でした。

遺体の片付けといった汚れ仕事も厭わず、平和の到来と共に経済の最重要品だった米を握る、というところ、すごいですねえ。初期淀屋幹部の胆力とビジネス手腕には唖ってしまいます。

その後1700年代に入って五代目の時、淀屋は突如として幕府に取り潰されます。手代の起こした金融不祥事が罪状ですが、あまりにも大きくなりすぎた淀屋の財力を警戒して、という見方もあります。

西国九州の大名で淀屋からお金を借りていないものは一つとしてなし、と言われていて、貸金の総額が銀一億貫というとてつもない巨額にのぼっていたとのこと。

銀一億貫って、どのくらいか全然わかりませんよね。

当時のお金を現在の貨幣価値に単純に換算するのは難しいのですが、目安としてよく採用される基準が、銀一貫＝約160万円です。

ということは、銀一億貫はその1億倍。つまり約 $1.6 \times 10^{14}$ ＝160兆円となり、今の国家予算レベルですね！

この額はさすがに事実ではなく、誇張ではないかと考えられていますが、それだけ淀屋の日本経済に持つ影響力が大きかったということでしょう。

この160兆円の借金も帳消しになり、大名たちは救済されたわけですが、この事件は商人・町人たちに大きな衝撃を与え、世は元禄の活気を失って、質素儉約の時代へと移ってしまいました。

このように戦国末期の混乱期にのし上がり、大坂の基礎を築きながらも、元禄バブルのあだ花のように一瞬で消えていった淀屋。

なんともドラマティックで、それゆえ淀屋に惹かれてしまうんですね。



大阪市中央区 淀屋橋南詰の淀屋屋敷跡碑

この水彩まんがでは江戸初期の寛永時代（1624～1643年）、3代将軍家光の時代を描いています。淀屋では2代目が主人であり、その全盛期にあたります。

この時期淀屋は大坂の発展に大きく貢献し、その内容も興味深いものですので、次号以降でそれらのいくつかをテーマにしていきたいと思います。

さて、今回の最後には、「いちびり」精神がよく現れている江戸時代の絵をご紹介します。

「浪花十二月画譜（なにわじゅうにつきがふ）」という江戸後期の本で、季節の風物詩をコミカルで温かいタッチの絵で描いているものです。これは私のイチオシの古典籍です。

絵がうまいこと、うまいこと。私はこんなに上手に描けません。

この画譜を描いた絵師に、時を越えて心より敬意を表します(´▽`\*)

今日はその一つ、「はまぐりとり」



浪花十二月画譜より 国立国会図書館蔵

見てください、これ。こんなはまぐり、ありえないですね。

「さあ、このはまぐり見てっておくれやす。ごついやろ。気いつけんと、ふんどし喰われまっせ！」

「そんなアホな！」

と市振る人たちはいちびっていたかも？

2012年12月23日

まんがもコラムも第3話につづきます

---

注1：「江戸時代おもしろビックリ商売図鑑」の『大坂 `町人の都、に花開く新奇で珍奇な商売群』北川央著より。益子広三郎の旅の記録は「西国順礼道中記」

#### おもな参考文献

「豪商物語」邦光史郎著、徳間文庫（1994年）

「大阪暮らしむかし案内 絵解き井原西鶴」本渡章著、創元社（2012年）

「大阪古地図むかし案内」本渡章著、創元社（2010年）

「天下の台所をつくった男たち 商業都市、大坂のバイタリティー」NHK歴史誕生（1991年）

「江戸時代おもしろビックリ商売図鑑」 新人物往来社（2009年）

「淀屋考千夜一夜 なにわの豪商波瀾の三代記」新山通江著、たま出版

## みずのみやこ大坂(2)

<http://p.booklog.jp/book/62819>

著者：新崎衣南未

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/inami-n/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/62819>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/62819>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ